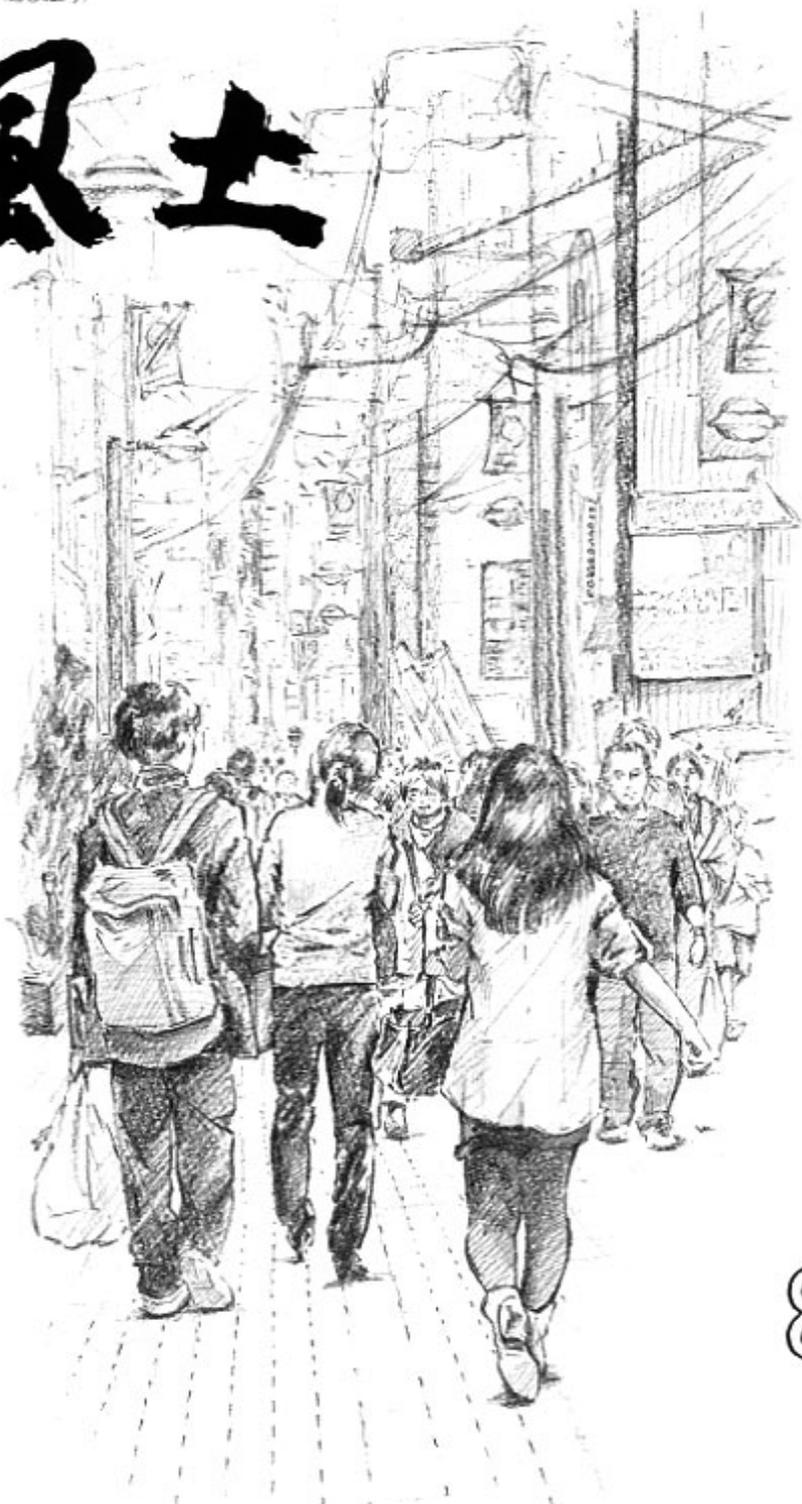


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成23年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第51巻8月号(通巻625号)

風土



雲の峰
神蔵器

沢蟹の念仏あかき泪かな

西行のその後の旅の青山河

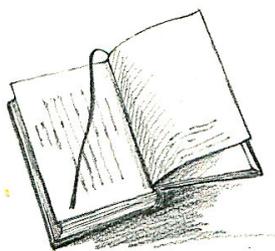
青鷺の動かず山の傾けり

桂郎の酒欲り刻や雨蛙

白靴の三鬼の下車す雲の峰

註 西東三鬼、桂郎を尋ねて鶴川に現はる

天上の音楽こぼれ花菖蒲
白き手ののびて椿の毛虫焼く
朴の花金覆輪の日の出かな
一幡に露のひびけり著莪の花
高床の正倉院や夏椿
枇杷熟るる太平洋の黒潮に
白南風や墓石どちは手をつなぎ



竹間集

同人作品



椎の花

外川 玲子

椎の花匂ふ夕べや野辺送り
梅雨蝶の夢のはじめに草の風
捨つるものにこだはりてをり西日中
雨蛙声綻びてをりにけり
善光寺樹屋上人御歌
万緑の中や笹文字やはらかし
朴散華「定額山」に仁王立つ
耳遠くなるはさみしき栗の花

桐の花

山多 暢子

風青くなりけり植田みな四角
画廊出て若葉の中のカフェテラス
囀りの合唱木椅子やや固し
豆ご飯無病息災とはゆかず
七十代半ばや高き桐の花
遠き木へいつも眼のゆく吊忍
遙かなる雲の流れや鑑真忌

夏 炉

門伝 史会

葉桜や母の形見の帯を締め
さみしさは己にありて春逝かす
菖蒲湯の青き匂ひに浸りけり
三浦 四句
鶺鴒の止まる池のかなめの舫ひ舟
薫風や鶴の翼に大藁屋
臥竜梅樹齡相似て茂り合ふ
背戸の風入れて夏炉をいぶしけり

「淡交」以後(三十二) 野沢しの武

えんぶりや銀杏神樹のまだ冬木
子えんぶりが烏帽子に潰されさう
子えんぶり髭描かれたる顔並ぶ
えんぶり太鼓負ひて恠へて睨む大地
えんぶりの終の夜の雪街に森に
声かけて人違ひなる雪解道
通るとき雛のあられを盗み食ふ

五月晴 鈴木 石花

境内に鶏鳴競ふ五月晴
万緑の岩殿観音鶏謡ふ
緋鯉浮く池に迫り出すお茶処
三溪園昔むかしの心太
水琴の水口塞ぐ蝸牛
朝曇インドへと吾子急に発つ
紅薔薇やシャンソンレッスンの決まる

遠郭公 山路 紀子

裂けるかも知れぬ大地や葱坊主
更衣して生き方を変えてみむ
迸る湧水夏のきたりけり
いまわれに女どきの風や桐の花
粽解く母のなぞなぞむすびかな
板壁に向きて座禅や若葉光
禅僧の一汁二菜遠郭公

藤の夜 岩木 茂

襖絵の鯉が跳ねたる夏座敷
藤の夜の石のひとつが猿田彦
でで虫を肩に睡らす才の神
檻畏の方二間なる草いきれ
鶴鶴の舞ひ降りてくる植田かな
田道間^{たじまもり}守命^{みこと}に松の緑立つ
「大鬼」の酒米田植糸山仰ぐ

帰郷

— 田中佐知子 —

夏 燕 靈 峰 雲 に 高 野 口
ち ち は は の 墓 を 包 め る 花 蜜 柑
カ ー ネ ー シ ョ ン 母 に 供 へ て こ と に 濃 し
総 出 し て 柿 の 花 摘 む 頃 な り し
葉 桜 や 女 人 高 野 の 乳 房 絵 馬
雨 霧 は 天 へ の ぼ り ぬ 桐 の 花
古 代 て ふ 江 戸 て ふ む ら さ き 花 菖 蒲
水 ぐ る ま 青 葉 若 葉 の 風 弾 き
万 葉 の 妹 山 背 山 鮎 の ぼ る
母 恋 へ ば 高 野 連 峰 夏 霞 む

山河集

同人作品



神蔵器選

葉桜の奥や少年太子像
内藤 静

能果てて後のさくらのすさまじき
丸太剥く匂ひの中や囀れる
新緑や堂の扉に鳳と鳳
竹皮をぬぎて自尊をつらぬける

藍の華甕につぶやく五月闇
林 いづみ

日月のしづかに遠き桜の実
退院の二転三転えごの花
青蛙さみしき時は跳びにけり
母の日は母のブラウス着て過ごす

夏に入る二月堂より水の音
雨宮 桂子

一灯の鑑真御廟青嵐
白すみれ一つ唐招提寺みち

はつなつの鑑真の掌に琼花咲く
けいか

琼花||鑑真が日本に持って来たという白い可憐な花

大山蓮華かくれ仏にまみえけり

夏立つや一杯の水仰ぎ飲む
浅田 光代

朴咲いて千枚の水動きけり
月光をのぼりつめたる蝸牛
緑さす西行像の頬骨に
尾の長き鳥の来てゐる梅雨入かな

影消ゆる八十八夜の交差点
柿沼 盟子

母の日の箒一日壁にあり
長靴の三和土に二足青蛙
木洩日の日を踏みゆけり閑古鳥
雪溪を指呼にパン焼く香りかな

長漕下り

榎本ふじえ

七変化春日局の化粧の間
泣き羅漢御母胸像に苔の花
緑陰に思案の立膝羅漢仏
時の鐘櫓の奥の夏木立
麦秋や音の百選時の鐘
夏帽子棒の麩菓子を土産とす

長漕下り

川蝉の岩の上にぞ美を放つ
急流のしぶき巻上げ夏の川
青嵐岩間を縫うて浅瀬着く
川下り漕に写せり青葉光

風土独語／神蔵器



能果てて後のさくらのすさまじき

内藤 静

作者はその日、渋谷区松濤の観世能楽堂に於ける三月公演を観劇されたようである。出しものは、狂言「富士松」をはさんで、能は「巴」「西行桜」「鉄輪」であった。

「巴」は義仲の愛妾、修羅物でもシテが唯一女武者で、悲しい物語でも愛があり、華があり、癒しがある。また「西行桜」は老桜、花の精シテと西行ワキは、はじめ対立の立場をとるが、「惜しむべし惜しむべし。得難きは時、逢ひ難きは友」と、両者はうち融けあつて春宵一刻、値千金の良夜の興へと流れていく。

ところが「鉄輪」は、後味が悪いので、上演されないものと思つてしたが、近頃は人気があるとかで結構上演されているという。物語は葵上の生霊、理性と教養に抑圧された高貴な女性の潜在意識からぬけ出した怨念、自分を捨てた夫に、この世での報復を願う女を描いている。

彼女は夜ごと丑の刻参りをするが、或る夜、貴船神社の社人（神官）が登場、女に神託を伝える。「赤い着物を着、顔に丹（赤色の顔料）を塗り、頭上鉄輪（五徳）を戴き、その三つの足に火を

灯し、怒りの心を持てば、生きながら悪鬼に変ずるであろう」と言うのである。それを聞いた女は、たちまち、ただならぬ様となり、荒々しく笠を投げ捨て疾風の如く立ち去る。

ここからが後場、一方、女人の夫は、あまりにも悪夢が続くので、陰陽師安倍清明を訪ねると、女の怨念によって今日明日にも死ぬ運命と見抜かれ、護身の祈祷を願う。やがて嵐の中に姿を現したのは、今や恐ろしい悪鬼と化した女の生霊（後シテ）、綿々と夫への愛の恨みを訴え、まず形代の髻（後妻）をとって打ちすえ、後妻の命を奪い、いざ夫の命をと迫ると、清明の祈護神がとりまいて、

魍魎鬼神は穢らしや、出でよ、出でよ

と責めたてられる。生霊（後シテ）は、今回は駄目でも、必ず後日を期してと、目に見えない鬼となつて消えてゆく。決して成仏などしない、永遠に消えない女の恨みの怨念をもつたまま…。

「鉄輪」の終了はおそらく午後六時前後になるであろう。その時刻は日は永くなくなって来ているといつても、日はとつぷりと暮れ、刻一刻夕闇が濃くなる夕べのかわたれ時ではなかったか。能の舞台上に幕は下りない。能楽堂を出て帰路についた作者の脳裏にも幕は下りていない。舞台はもちろん原作にも桜は見えないようだが、「さくらのすさまじき」と、作者は最後にさくらを登場させ、さくらをもつて人間の総べての心を救済した。凡手のおよぶところではない。

（以下略）

風土集



神蔵器選

鶴鴿の尾を翻し夏來る 京都 杉本葉子

体重計針の気になる梅雨の入り
青梅や東山より晴れてくる
どくだみの花こそ命白十字
子の靴の父より大き端午の日
盆栽の気根百歳青嵐 東京 林いづみ

三溪のこころざしなり朴咲けり
いづこにも水のこゑあり初蜻蛉
むらさきは業平の色花菖蒲
黒光る箴薫風の居座機
夏立つや淡路にとどく橋の果て 京都 西村雪園

夏立つや風に吹かるる岬にて
舟曳きの径を残せし保津若葉
菜の花や一途に湖へ出る道へ
櫓の反りをくぐる水音湖の夏

雛僧の捨て鐘二つ麦の秋 横浜 近藤幸三郎

噴水の頂点そこはプリマの座
永らへし身代り灯籠梅雨に入る
夏雲の鯨となりて泳ぎ出す
空奔る雨降り山の滝餅
麦飯やランプシールドにガレの蝶 藤枝 間島あきら

文学館へ渡る回廊夏燕
酒蔵の木戸を立夏へ開け放つ
小米花木屑飛ばして駒を彫る
王将の文字の漆黒夏に入る
風薫る僧の法衣の濃むらさき 川崎 及川澄江

箱書の埃を払ひ麦の秋
避難所の小学校に幟立つ
聖五月白洲正子の展覧会
母の日と重なる夫の誕生日